



城

第五十九回

砥石(戸石)城

～武田、真田両氏の戦いに多く関わる山城～

山本 忠博

砥石(戸石)城は、現在の長野県上田市に在った幾つかの山城を集合させた城郭です。もともとは複数の山城の内の一つを砥石城と呼んでいたものを、集合全体を指して砥石城と呼ぶようになったと言われます。この山城は、甲信地方の戦国期の有名な幾つかの戦いに関わっていますので、戦国ファン、特に武田氏や真田氏に興味のある人には、かなり有名な城と言えるでしょう。

砥石城のはじめ

砥石城の近くに真田氏発祥の地が在ることからも知れるように、この城は、はじめ真田氏の城として築かれたと言います。真田氏の本城を囲む支城群の一つで、北東に真田本城を見ながら、南に上田平を一望できる位置に在りました。正確な築城年代は不明ですが、1541年の海野平の戦いの際には確実に在ったろうと推測できます。海野平の戦いは、真田氏とその本家筋が、甲斐国(現山梨県)の武田氏と信濃国(現長野県)北部の村上氏と信濃国中部の諏訪氏の連合軍に攻められた戦いで、真田氏が一時的に没落した戦いです。真田氏は関東管領の上杉氏を頼って上野国(現群馬県)に逃れたため、村上氏が砥石城を接収して大改修を行ったと推測されています。

武田信玄の砥石崩れ

海野平の戦いの際の武田家の頭首は信玄のお父さんですが、その直後に信玄がクーデターを起こして、実の親を追放して甲斐国を乗っ取っています。そこから、信玄は同盟相手であった諏訪氏と手を切って滅ぼし、さらに少しずつ信濃国を侵略するようになります。武田信玄と言えば戦国期のビックネームですから、若いうちから破竹の勢いで信濃国の攻略を進めたと思われるでしょう。しかし、実のところそう上手くいったわけではありません。信玄の前に上

述の村上氏が立ちはだかります。

まずは、1548年の上田原の戦いです。信濃国侵攻を続ける信玄と、信濃国北東部で勢力を拡張した村上氏との戦いです。一説に武田方は8千の兵力で村上方は5千の兵力だったと伝わります。村上方は砥石城を重要拠点として上田平に展開し、武田氏と激突しました。はじめ武田方が優位に戦いを進めたようですが、武田方の先鋒が深入りしたところを村上方が逆襲に転じ、そのまま信玄の本陣まで迫ったと言います。この戦いで信玄は複数の重臣を失い、信玄自身も傷を負う有り様でした。

上田原の戦いの雪辱を果たすべく、信玄が砥石城を囲んだのは1550年のことです。武田方の兵力7千に対して砥石城の村上方は5百だったと伝わります。城方は少数でしたが、過去に武田方から過酷な仕打ちを受けた者達が多くいたため、信玄への恨みから士気はすこぶる高かったと言います。城方は開戦当初から善戦し、這い上って来る武田方に石を落とし、煮え湯を浴びせて大損害を与えました。そして、武田方が苦戦している間に村上氏が2千の兵を率いて現れ、武田方を城兵と共に挟撃し、さらには熾烈な追撃戦を展開しました。信玄は、村上氏相手に二度目の敗北、それも大敗北を喫します。この信玄の負けっぷりは、“砥石崩れ”と呼ばれています。

真田氏による砥石城の奪還

さて、信玄の砥石崩れの後に活躍し始める一族がいました。砥石城の元の主であった真田氏です。この時期の真田氏の頭首は、稀代の軍略家として有名な真田昌幸のお父さんであり、日本一の兵と称された真田幸村のお祖父ちゃんに当たる人物です。この人は、先の海野平の戦いで上野国に逃れた後に、砥石崩れの前から信玄に臣従しており、信玄が力攻めで落とせなかった砥石城を、1551年にあっさりと調略で落としています。

その後、村上氏は信玄に圧迫されて信濃国を追われ、真田氏は信玄の下で旧領を回復することになります。

第一次上田合戦

時は下って1585年です。この時には武田家は既に織田信長おだのぶながによって滅ぼされており、真田氏は独立した勢力となって、徳川氏とくがわと北条氏ほうじょうと上杉氏うえすぎの三大勢力の狭間で、その勢力をなんとか維持していました。頭首は真田昌幸です。昌幸は、本能寺の変で信長が討たれた混乱期に、はじめは北条氏に与し、その後徳川氏に与し、さらに徳川氏と手切れとなって上杉氏に走りました。徳川氏に与していた時に、对上杉戦を想定して徳川氏の支援を取り付けて上田平に上田城を築城し、その上田城を対徳川戦で使用します。これが第一次上田合戦です。詳細は第15回の上田城をご覧ください。

砥石城は、第一次上田合戦の際に重要な拠点になっています。ここに、昌幸の長男にして、人気の真田幸村のぶゆきの兄に当たる真田信之が、300の兵を率いて入りました。

少し話が逸れますが、ここで真田信之を紹介しておきましょう。この人は、父の昌幸と弟の幸村の陰に隠れて、後世に名は知られていません。知っている人がいたとしても地味なイメージでしょう。しかし、生前は、後世とはだいぶ違うイメージで周囲に見られていたようです。信之は、信長死後の混乱期に北条氏に奪われた城を、見事に采配を振って少数の兵力でわずか一日で奪還し、その非凡さを周囲に示しています。また、残された甲冑からみてかなり大柄な体格だったようで、資料に残る戦いぶりを見ても勇将であったことが判ります。徳川家康の息子の紀州藩祖からは、その武勇と器量を敬慕され、徳川幕府四代将軍からは「天下の飾り（手本とすべき人物）」と呼ばれているわけで、地味どころか、かなり目立った人生を歩んだ人のように思われます。

さて、話を戻して第一次上田合戦です。信之は砥石城から出撃し、徳川勢に一当たりしてから本城の上田城の方へ徳川勢を誘い込むように引いていきました。ここから先は第15回を見て頂くとして、上田城で手酷い反撃を受けて逃げてくる徳川勢にとどめを刺したのは信之です。上田城に徳川勢を誘い込む役については異説がありますが、逃げてくる徳川勢

を完膚なきまでに叩くのは、砥石城から打って出た信之勢であることには異説はありません。徳川方のある将は、後に、この時の徳川の将兵の様子について、「酒の飲めないやつに酒を飲ませたような有り様だった」と書き残しています。

第二次上田合戦

それからさらに少し経って1600年です。関ヶ原の戦いです。この時は、昌幸と幸村は上田城に籠もって豊臣方につき、信之は徳川方につきました。そして、信之は徳川勢による上田城攻撃に参加することになります。これが第二次上田合戦です。

この時、幸村は砥石城の守備を担っていました。これに対して、信之が砥石城攻略に向かいました。悲しい兄弟対決になるかと思われましたが、幸村は無血開城して上田城に引き上げ、その後を信之が占拠して、そのまま守備につくことになりました。

結果として、昌幸と幸村はこの局地戦に勝利し、信之は城取りに成功して手柄を上げる形となり、両陣営の真田氏の面目が立つ形で第二次上田合戦を終えています。

現在の砥石城

もともと本城を護る支城として築かれ、支城の機能を全うした城ですから、防衛陣地以外の遺構、例えば屋形跡等はありません。しかし、戦国中後期の山城としての防衛陣地の遺構はよく残っていますし、高所の曲輪からの眺望は格別です。ただし、武田軍が攻めきれなかった難所ですから、気軽に登れるわけではないので、それなりの覚悟で登頂してください。



砥石城の遠景